

『終わりよければすべてよし』

地球中心説から太陽中心説への揺らぎの中で

大住有里子

シェイクスピアの最後の喜劇と言われ、また問題劇とも言われる『終わりよければすべてよし』を、天文学の観点から読むと、劇作家が執筆時代に起こりえなかった結婚を実験的に成就させて見せた喜劇と論じる。

本作品の陽気なタイトル「終わりよければすべてよし」とは裏腹に、喜劇といい難しい点は多くの批評家により多々挙げられてきた。例えば、女主人公ヘレンがパートラムによって課される難題の解決のために使うベッドトリックの後味が悪いことや、サミュエル・ジョンソンのパートラムを「どうしても受け入れることができない」という感想も有名である。しかし RSC 全集版の本作品の Introduction は「シェイクスピア作品の中で演じられることが大変少なく、最も愛されていない喜劇の 1 つ」という定義に続けて「大変魅力的で好奇心を掻き立てる現代的作品」(Bate and Rasmussen 574) と結論づける。確かに、ヘレンは定められた運命に身を委ねず、人生を切り開こうとし、現代的である。また、当時として存在しなかった求婚スタイル、すなわち女から男を選び結婚するという点でも現代的である。更に意味深いのは、作品の社会背景である初期近代イングランドでは、すべてのものの存在が「秩序」で定められていたが、ヘレンは結婚によって社会階層の上昇を成功させる。初期近代イングランド社会の「序列」の源は宇宙であった。『終わりよければすべてよし』と執筆時期に近い『トロイラスとクレッシダ』第一幕第三場でユリシーズが 103 行に亘り展開する序列論は、当時のイングランド社会を反映している。宇宙の序列は実社会の序列の拠りどころであった。しかし、その拠りどころに新たな宇宙論が加わろうとしていた。従来のプトレマイオスの宇宙論である地球中心説に加えて、コペルニクスの太陽中心説が発表され、知識階級の間で新たな宇宙論が徐々に広まろうとしていた。

1. 当時の宇宙論

初期近代における西洋での天文学は、古くギリシャの哲学者アリストテレスの考えが引き継がれ、ギリシャの天文学者であるプトレマイオスの『アルマゲスト』に記された宇宙論が活用されていた。プトレマイオスの宇宙観では、宇宙は地球を中心として 9 層から 12 層の天球で構成され、月の天球を境に、月下界と月上界に分けられた。月下界は 4 元素（土、水、風、火）で構成され、生と死のある世界である一方、月上界は「エーテル」というものででき、恒常不変の天球が広がる。月から上の天球は、月、水星、金星、太陽、火星、木星、土星、更に天球の回転の原動力となる Primum Mobile があった。Primum Mobile の動きは、外側から内側の天球へ伝わった。天球は秩序を形成し、一番外側が秩序の最上位に位置し、天球は内側に位置するほど階層も下る。この秩序は人間の世界にも適用され、力の作用は社会の上層から下層へ伝わり、逆行はしないとされた。また人間は生まれた日時により影響を受ける星が決まり、性格も定まるとされ、星との関係を占う占星学の源も地球中心説の宇宙像だった。ところが、地球中心説では説明がつかないことが出現する。同じ日時に生まれた双子の性格が大きく異なることや、1577 年と 1607 年、イングランド上空に彗星が現れ、恒常不変の月上界から来ていることが観測された。コペルニクスが『天体の回転について』(1543) において発表した太陽中心説がイングランドにも浸透するきっかけとなった。当時のイングランドのみならず、ヨーロッパにおいてコペルニクスの太陽中心説は限られた知識人の間で話題になっていたが、決して急激に世に広まったのではなかった。しかし、シェイクスピアは太陽中心説を本作品に盛り込んでいる。

2. 作品内に見られる宇宙論

第 1 幕第 1 場でヘレンは観客に伯爵パートラムへの恋心を明かすが、パートラムは月上界の恒星で、自分は月下界から眺めるだけと地球中心説に基いて嘆く。直後パートラムの従者であるパローレスとの口喧嘩で、“When he was predominant.” (1.1.194) 「火星の力が強い時に生まれたので勇敢な戦士」と占星術用語 predominant を用いて自慢するパローレスに対して、ヘレンは “When he was retrograde, I think rather.” (1.1.195) と retrograde を占星術的に用いて「火星の力が弱い時に生まれた」と揶揄するだけでなく retrograde を天文学的に「後退する」の意味で用いて「戦場でも後退する臆病者」とやりこめる。知識階級の間で、自然を説明するには新たな宇宙論が必要であることが認識され、そのことを劇作家も認識し、占星術用語と天文学用語の両方の意味を持つ retrograde を用いたと推測する。そして第 1 幕第 1 場の最後にヘレンが独白をするが、地球中心説と太陽中心説の両方を反映した台詞である。

HELEN Our remedies oft in ourselves do lie
Which we ascribe to heaven. The fated sky

Gives us free scope, only doth backward pull
Our slow designs when we ourselves are dull.
What power is it which mounts my love so high,
That makes me see, and cannot feed mine eye?
The mightiest space in fortune nature brings
To join like likes, and kiss like native things.
Impossible be strange attempts to those
That weigh their pains in sense and do suppose
What hath been cannot be. Who ever strove
To show her merit that did miss her love?
The King's disease – my project may deceive me,
But my intents are fixed and will not leave me. (1.1.212-225)

ヘレンは、生まれたときから星の影響を受け、階級も下降することはあっても上昇することはないとプトレマイオス宇宙論で裏付けられている社会の通説を観客に呼び起こし、同時にそれに対しての挑戦を宣言する。自らより上の階級にいるバートラムとの結婚を望むことは、天球の秩序が定まっている地球中心説では不可能で、新たな宇宙論である太陽中心説の存在があつて初めて可能になる。

当時、現実社会では階級の流動性が生じており、階層を跨ぐ結婚は歓迎されるものではなかった。階級を超える結婚として、経済的に困難に陥った貴族が裕福な商人の娘を迎える例はあった。ヘレンは裕福ではなく、当時の階級を跨ぐ結婚例とは異なる。しかし、劇作家はヘレンのバートラムの階級との隔たりをわずかなものに設定している。ヘレンの父、内科医は階級の流動性が生まれた社会の中で「新参ジェントルマン」と見做せる（中野 253）。

3. まとめ

シェイクスピアが劇作した時期は、天体観測の発達とともに、既存の宇宙論では説明しきれない事象が生まれ、アリストテレスとプトレマイオスの地球中心説に、新しいコペルニクスの太陽中心説が取って替わろうとする過渡期だった。シェイクスピアがどちらの宇宙論を支持するかは本作品からは読み取れないが、新しい太陽中心説を取り入れた台詞をヘレンに言わせているのは上述の通りである。本作品最後は、王の台詞 “All yet seems well, and if it end so meet/ The bitter past, more welcome is sweet.” (5. 3. 330-31) で締めくくられ、Anne Barton はこの王の台詞に、作品中で Helen が発する “All's well that ends well” とは異なる役割を見出す。つまり、ヘレンが発するのはフィクションの中で のことであり、王が発する劇を締めくくる台詞は現実にはこうはいかないということを観客に思い出させていると (Barton 537)。筆者は次のように異論を述べたい。社会の動向を観察しつつ、観客の心を惹きつける創作を常に考えていた劇作家は、不思議な自然現象、宇宙論の揺らぎ、その宇宙論が源となっている社会階層を作品に盛り込んだと考える。現にシェイクスピア家も紋章を申請し、階層上昇を試みている。当時の階級の流動性は宇宙の定理に反した。しかし、地球中心説から太陽中心説に変わり、宇宙の秩序が変わるのだとしたら、生まれた時から将来までを支配する秩序から人は解放されるかもしれない。『終わりよければすべてよし』は世の秩序の籐が少し外れるとどうなるかを示した作品と言える。秩序が綻びれば、現実起こっている社会階層の上昇も咎められることはない。『終わりよければすべてよし』は社会階層の上昇を成功させる結婚を表すと同時に、更にフィクションを用いて、当時現実にはあり得なかった、女が上の階層の男を結婚相手として選ぶ夢物語を描いて見せたと言える。ただし、ヘレンを大衆の最上階層に設定にした点は、舞台上の結婚が荒唐無稽と思わせない工夫によるものである。劇作家は、劇場内で観客を現実世界から解放し、観客が劇場を出て現実世界に戻っていくときも、現実社会の束縛からの解放に淡い希望を抱かせたと解釈する。

引用文献

Bate, Jonathan and Eric Rasmussen. Introduction. *All's Well That Ends Well, The RSC Shakespeare Complete Works*. Edited by Jonathan Bate and Eric Rasmussen, 2nd ed., Bloomsbury, 2022, pp. 574-633.

Barton, Anne. Introduction. *All's Well That Ends Well, The Riverside Shakespeare*. Edited by Blakemore Evans, et al., 2nd ed., Houghton Mifflin, 1997, pp. 533-537.

William Shakespeare, *All's Well That Ends Well*, ed. Suzanne Gossett and Helen Wilcox, 3rd edn, Bloomsbury, 2019.

中野春夫『恋のメランコリー——シェイクスピア喜劇世界のシミュレーション』研究社, 2008.